

まゆからできるふしぎな糸

筑西市立大田小学校 二年 菊池雄平

「キユツ、キユツ、キユツ。」

ばあちゃんの手からは、まほうのように、どんどん糸ができてきます。とつても細くて、きらきらしたきれいな糸です。ふしぎに思い、ばあちゃんの手もとをのぞきこんでみると、「糸とりだよ。わたから糸をつむいでいるんだ。この糸で、き物を作るんだよ。」

と、ゆうきつむぎのことを教えてくれました。

ぼくのお母さんのじつ家はゆうき市にあります。「ゆうきつむぎ」というのは、とつてもゆう名なき物で、むかしから一つ一つ手さぎようで作られる大切なものだそうです。「カイコ」という青虫みたいな虫が「まゆ」という白くて丸いからを作り、そのまゆを「わた」にします。ばあちゃんが糸にしているのは、この「わた」で、ばあちゃんの糸に色をつけておつていくと、「つむぎ」というぬのになるそうです。

ぼくもまねをして、わたをひっぱつてみました。ただちぎれてしまうだけで、糸にはなりません。かんたんに見える「糸つむぎ」ですが、とつてもむずかしいことがわかりました。ばあちゃんは、指につばをつけながら糸をつむぎます。

「きたなくないの。」

「つばでないのだめなんだよ。水では、つむぎのよさが出ないんだね。」

なんだかとつてもふしぎに思いました。

家に帰ると、お母さんがタンスの中から大きな紙のふくろを出してきました。

「お母さんのたから物よ。ばあちゃんの糸で作ったんだよ。あなたにきせてあげられないのがざんねなだけだね。」

ピンク色のつむぎのき物でした。ぼくも、いつかきつとばあちゃんの糸で、およめさんにつむぎのき物を作ってあげたいです。ばあちゃん、ずっとずっと元気で、きれいな糸をつむいでください。

大すきじいちゃんの『だつへ』

北茨城市立中郷第二小学校 五年 最上嘉洋

「どーれ、ちーつとさん歩いてくつぺ。嘉洋も行くがあ？」

「うん、行く、行く。」

じいちゃんにさそわれ、ぼくは軽く返事をした。でも、じいちゃんとのさん歩は、ちーつとではなかった。さん歩中に、じいちゃんは、

「あかねひらの山に、雲がかかってつがら、明日は雨だつぺなあ。嘉洋、学校には力サ持つてつたほうがいいべ。」

と、天気予報士になったり、

「昔、ここは炭ごうの町で、石炭のにおいがプーンとして、年中トラックが走つてたんだあ、今は炭ごうもなくなり、静

がな町になつちまつたあ、道路もガタボコでなあ…。」

と、昔の町の風景や、暮らしぶりを説明するガイドさんになった。じいちゃんの昔話は、教科書にのつてない内容で、想像しかできないばかりも、その時代が見えたような気がした。音の出る葉っぱや、食べられる草も見つけ、まるで宝さがしをしているようにわくわくし、気がつくくと、どんどん遠くまで歩いていく。

と中、じいちゃんがジュースを買ってくれ、ぼくは息をつかずゴクゴクといつきに飲んだ。冷たいジュースが、スーッと体の中に入っていくのがわかった。二時間ぐらいのさん歩で、家に着いた時、ひざがカクツとなり、足全体が重たかった。ぼくは、じいちゃんに言った。

「じいちゃんはずいよ、つかれないの?」

「んだな、ちーつと歩きすぎだがあ? 今度は水とう持って行くべなあ、はははは。」

と、あせいっぱいの顔を手ぬぐいでふきながら、笑って答えるじいちゃん。三年前、父の転きんで茨城に引っこしてきて時、ぼくは、じいちゃんの茨城なまりが通じなかった。

ゴミをどこに捨てたらよいのかと聞くと、

「じいちゃんがかつぼるから、そのまんまにしとげえ、嘉洋にたのんだら悪かつべ。」

おふろに入っていると、

「じいちゃんのあとは、あちーがら、うんとうめて入れえ、んだげど、うめすぎつと、ひゃつこくなるから、気ーつけろよ。」

など、だく点がつく発音や、わからない方言が多かった。で

も、茨城べんはどこかポカポカあつたかく、きれいな言葉づかいではないけれど、じいちゃんの思いやりの心が伝わり、ふるさとのおいがする。だつべの中にやさしさがギュツとつまつて、ぼくは大すきだ。これからも、じいちゃんや近所のお年よりの方にたくさん話を聞いて、歴史や文化、自然を大切に、茨城がぼくのふるさとなればうれしい。そして、ぼくがおとなになった時、「むかーし、昔、この町は…。」と、未来へつなぐことができたなら、すてきなあと思う。

さん歩後、少し休んでからぼくは言った。

「じいちゃん、キャッチボールやつべ。」

「んだな、やつがあ、んだけど、外はまだあちーから、ぼうしかぶんねーとだめだつべ。」

「うん、そうだね、だめだつべ!!」

いしまでも美しい千波湖で

水戸市立見川中学校 二年 都 築 愛

「わあ、すごい。」

八月一日の夜。私は千波湖畔で、次々と打ち上げられる花火を見た。色とりどりの花火。大きな音と共に、夜空に大輪の花を咲かせる。毎年見ているけれど、毎年違った趣向が凝らされていて、人々を飽きさせない。黄門祭り第一日目のイベントとして、毎年多くの人々が千波湖の美しい夜空を見上げている。水戸市に住んでいてよかったなと思うひとときである。

花火大会の夜は、にぎやかで華やかな色に包まれる千波湖だが、昼間は静かで、穏やかな水面にボートが浮かんでいる。休日に、家族連れがゆつたりとボートをこぐ光景を、目にするのがよくある。そんな光景を目にすると、小さい頃、家族と一緒にボートに乗っていた自分を思い出す。ボートから見える、美しい水面や植物などが、今でも脳裏に残っている。

しかし、今年になって痛ましい事件が起こった。千波湖にいる白鳥や黒鳥が、少年に乱暴されて殺されてしまったのである。休日に湖に行くと、寄ってくるほど人間に慣れていた白鳥たち。そんな愛らしい白鳥たちを、面白がって殺してしまふとは、なんてひどいことをするのだろう。鳥にだって、私たちと同じように命がある。どんなに小さい命だとしても、人間と同じ価値があるのだ。その大切な命を、人形を壊すように絶やしてしまった少年は、何を考えていたのだろうか。また、その様子を見ていた白鳥たちは、何を思ったのだろうか。この事件があつてしばらくは、白鳥たちが人間に寄ってくることはなかったという。

それから三か月程が過ぎ、千波湖は、元の穏やかさを取り戻した。先日、千波湖を訪れた時、美しい水面をすいすいと泳ぐ白鳥たちを見て、思わず、

「元気になってよかったね。」

と声をかけてしまった。白鳥たちも、嬉しそうに頷いているような気がした。そして、私も嬉しくなった。

千波湖は、四季折々に違った表情を見せ、人々を楽しませてくれる。桜の花満開で、水面までも桃色に染まったかと思

うほど、花びらで敷き詰められる、華やかな春の千波湖。何百発もの見事な花火が打ち上げられ、多くの人を魅了する、豪快な夏の千波湖。萩の小花に囲まれ、紅葉した木々を眺めながら、冬の訪れをゆつくりと待っている、静かな秋の千波湖。そして、水面にうつすらと氷が張り、キラキラと光を放ち輝きを見せる、美しい冬の千波湖。今は、暑い太陽の熱を一面で受け、一年分のエネルギーを内にためこんでいるような雄大さを感じる。私は、一年中いつでも色々な魅力を見せられる、そんな千波湖が大好きだ。

私の母は、私が赤ちゃんの時から、この千波湖をよく訪れたという。子供と遊びながら湖を眺めることが好きだった母の影響もあつてか、私は、千波湖を見てみると何故か心が落ち着く。私が、雄大な湖をずっと見てきたように、千波湖は、私が赤ちゃんの時から今まで成長してきた様子を、見守っていてくれたような気がする。嬉しい時の笑顔も、悲しい時の涙も、湖は知っている。そんな私の表情をこれからも映すことができるような、きれいな水面を保ち続けてほしい。

私たち水戸市民の顔、茨城県民の誇りとしての千波湖を、みんなで守り続けていきたい。二度と湖が汚れないように、みんなで気をつけていくことが必要である。また、子供から大人まで、たくさんの目で湖を見守ることも必要なのである。

そして、日本一の素晴らしい湖と言われるように、これからもずっと、千波湖を大切にしていこう。そのために、私にできることがあるならば、活動していこうと思っている。

大好きなふるさとの伝統を繋ぐ

県立下妻第一高等学校 一年 木村 早希

私は、今住んでいる町が大好きだ。畑や田んぼばかりで、電車も走っていない。不便なことも多少はあるが、この町に生まれ、この町で育ってきたことを誇りに思っている。

私の町の良い所を紹介すると、まず、食べ物美味しい。茨城県の特産品というと、第一には納豆が連想されるが、私の町では、レタスやネギなどの野菜づくりが盛んである。地元で採れる野菜や果物はとても新鮮で栄養があり、学校給食などにも積極的に取り入れられている。また、私の家は今はもう農家ではないのだが、祖母は今でも、畑で様々な野菜をつくってくれている。野菜に関しては、ほぼ自給自足の生活だ。これは何もわが家に限ったことではなく、多くの家庭が農家でなくとも野菜を栽培している。しかし、この生活がどこでも送れるのかと言えば、そうではない。私たちの生活にとっては当たり前のことであるから普段は忘れてしまいがちだが、このような生活が送れるのは、茨城の豊かな自然があるおかげであり、とてもありがたいことなのだと感じている。そしてもう一つ、忘れてはならない良い点は、町民がみな良い人たちばかりだということだ。近所付き合いが盛んで、採れた野菜のお裾分けなども日常茶飯事である。挨拶をすると、名前も知らない通りすがりの人でもきちんと返してくれる。おじいちゃんおばあちゃんも、みな生き生きとしていて輝いている。

まだまだ自慢したいことは山ほどあるのだが、最近になって、その他にも未来に繋いでいきたい、素晴らしい文化があることに気が付いた。そのきっかけは、ある日、学校で古典の授業を受けていた時のことであった。文語の動詞の中に、力行変格活用の「来」というものがあり、それについて学んでいて、先生がとても興味深いことを教えてくださったのだ。それは何かというと、方言についてである。私の住む町を含めたその周辺の地域には、誰かに急いで来てもらいたい時に使う、「はっこ」や「はつこよ」という方言がある。使う人の数はあまり多くなく、実際に私が知ったのも中学生になってからである。それから、おもしろい響きだなあとはい思いつつも、深く考えることは無かった。しかし、先日その先生が教えてくださったことには、なんと、その方言は、先程の「来」の命令形「来よ」が変形したものなのだそう。もったいないの意味である「あたらし」という方言も、元を辿れば、古典の「あたらし」という語から来ているらしい。この他にもまだまだたくさんあるに違いないが、つまり私たちは、大昔から使われていたことばを今でも使っているということになるのだ。

私はこの話を聞いて、とても感動した。使っている人は少ないながらも、千年以上も前のことばが、私の身近な所で絶えることなく継承されている。今から何千年後かに、現在私たちが使っていることばが残っているとしたら、と考えてみても、全く想像がつかない。それほどスケールが大きく、驚くべきことである。また、私は、感動すると同時に、大変嬉しく思った。今まで、地元以外の人に方言やなまりを使うと

馬鹿にされることがあつたので、使うことを躊躇していた。しかし自分の地元の方言の偉大さを知った今は、胸を張って使うことができる。誰かに馬鹿にされたとしても、もうためらわない。いかに素晴らしく、凄いものなのかを伝えられる。そして、地元の伝統文化に誇りを持ってたことで、自分が他の地域の異文化に出会ったときでも、素直に受け入れ、尊重することができるようになると思う。

私は、先生が私たちに教えてくださったように、これから未来を担う子どもたちにこのことを伝え、どうか受け継いでいってほしい。現代社会では若者のことばの乱れが顕著に現れていて、私自身もそれに染まってしまっている。しかし、このままでは文化が衰退し、私たちが、今までずっと繋がってきたバトンを落としてしまうことになる。そうならないためにも、私は、自分自身を見直し、変わっていかなくてはならないと思つた。今回の出来事が、それに気付かせてくれた。私たち若者には、＼これまで＼と＼これから＼の橋渡し役になる責任がある。

もちろん方言だけではなく、農業や伝統行事、人との関わり方など、たくさんさんの伝統に触れ、その重みを感じながら生活していきたい。それが私にとつての、大好きなふるさとへの恩返しであり、ふるさとを守ることなのだ。

